

俊乘房重源の東大寺再建について

西 田 圓 我

一

俊乘房重源上人の作善行は、わが國中世佛教史を色どる画期的な出來事であり、まさに世人の注目を浴びて餘りある業績として評價されなければならぬまい。それは僧侶としての彼の主體性（勸進）にもとづくものであるが、彼の拔群の政治力が老若男女上下貴賤を結集して初めてよくないえたものと評價出來るのである。從來の研究では、爲政者の側と重源との關係は比較的よくとらえられたが、老大な勞働力の供給源となつた庶民との關係は等閑視されたきらいがあつた。私は重源の東大寺再建に焦點をしばりながら、從來等閑視されがちであつた庶民との交渉も積極的に取上げ、しかも爲政者の側との交渉をもとらえて總合的な判斷に立つて重源の東大寺再建を評價していきたいと考えるのである。

日本中世佛教史を概觀する時、東大寺の上人と世にうたわれた重源の勸進活動は、眞に我々の關心を引くに充分であり、また中世の佛教が勸進の佛教であると云われる所以もここにあるかのごとき感をさえ覚えるのである。

重源は、保安二年（一一二一）^{（註1）}紀季重の第四男として、京都に生まれている。古代から續いた名門紀氏の出自であ

る。續群書類從卷百六十八所收の紀氏系圖によると、瀧口左馬允の役職を持つ季重の子息であるから、當時としては中流貴族の出身であつたと云うことが出來よう。幼少の頃の史料は欠けていて判然としないが、長承二年（一一三三）十三歳で醍醐寺に入つて出家得度して佛弟子としての第一歩を印し、上醍醐圓明房に居住したようである。^{（註2）}醍醐寺新要錄卷第十一、金剛王院篇に見える「法流血脈事」によると、金剛王院權大僧都源運の門流として重源の名が見えている。

その後の重源は、若き日の弘法大師空海がそうであつたと同じように、諸國行脚の修行の旅に出ている。南無阿彌陀佛作善集によると、保延三年（一一三七）十七歳の時、空海の遺跡を慕つて、四國邊を修行して廻つて^{（註4）}いる。保延五年（一一三九）十九歳の時には、初めて大峯を修行し、また熊野、御嶽、葛城等の靈場を巡拜している。^{（註5）}その後、また

弘法大師の遺跡を慕つて、高野山にも登つてゐる。若き日の重源は、眞言宗の開祖空海を敬愛し、みづからの規範としていたに違いない。空海が讃岐の満濃池を作つて、農民の難澁を救つたり、庶民の教育機關たる綜藝種智院を作る等の福田事業を残しているごとく、重源の勸進活動の第一歩も、久壽二年（一一五五）六月廿一日、久方ぶりで出家得度した醍醐へ歸つて、栢杜堂を建て、九鉢阿彌陀像を造ることに結縁することによつて、その幕を切つて落したのである。^{（註6）}

龍谷大學の二葉憲香教授の言葉を借りると、日本佛教史における反律令佛教の系譜は、聖德太子に初まり、光明子に受け繼がれ、私度僧行基を経て、最澄、空海に至り、さらに重源・叡尊・忍性等に受け繼がれているようである。^{（註7）}大谷大學の五來重博士の説によると、勸進とは、宗教的作善と社會的作善とを共に併せ行ふことであると云われる。^{（註8）}

これらの説に助けられると、空海を敬愛しながら行なつた重源の勸進活動の持つ意味と、日本佛教史上における位

置付けとが、私の脳裡にはつきりと理解できるように思えるのである。最初に業績の分類分けから初めよう。

保安二年（一一二二）から建永元年（一二〇六）に至る重源一生涯の業績をつぶさに検討して、これを三つの期間に分けて考えたいと思う。

第一の期間は、保安二年（一一二二）から治承五年（一一八二）に至る六十一ケ年間である。

第二の期間は、養和元年（一一八一）東大寺大勧進職に任命されてから建仁三年（一二〇三）東大寺總供養に至る十三ケ年間である。

第三の期間は、建仁三年（一二〇三）生涯の業績を録した「南無阿彌陀作善集」を作つてより建永元年（一二〇六）八十歳の高齢をもつて東大寺において示寂した四ケ年間である。

第一の期間は、年期の上では六十一ケ年間と非常に長いが、重源にとつては、云わば脚光を浴びない恵まれざる時代であつたと云うことが出来る。

第二の期間は、東大寺再建の勸進のことに奔走した云わば重源の眞骨頂を示した最も脚光を浴びた時代であり、小稿で中心に論じようとするのも實はこの時期なのである。

第三の期間は、云わば重源にとつて、晩年の整理の期間であつたと考えても大過ないであらう。

さてここで私は、小稿で中心に論じようとする第二の期間をさらに細かく三つの期間に分けて考えたい。

第一期。養和元年（一一八一）八月、重源に東大寺造營勸進の宣旨を賜つてより文治元年（一一八五）八月廿八日、東大寺大佛開眼供養に至る五ケ年間。

第二期。文治元年（一一八五）より建久六年（一一九五）三月十二日、東大寺供養に至る十一ケ年間。

第三期。建久六年（一一九五）より建仁三年（一二〇三）十一月卅日、東大寺總供養に至る九ヶ年間。と云うことになる。第一期は、重源が懇望して彼の右腕としてその力量を高く評價した宋の匠、陳和卿の指導のもとに大佛の鑄造が行なわれ、完成の暁には、後白河法皇の臨席を得て親しく開眼供養の盛儀がとり行われた。

第二期。この期間が重源にとつて、最も苦勞の連續の期間であつた。大佛の開眼は終つたが、まだそれを入れる堂宇の造營が残されていた。院廳は文治二年（一一八六）三月廿三日、周防國を東大寺造營料に宛て、重源をして國務を管せしむる儀を發令した。文治二年（一一八六）四月十八日、早速重源は、番匠等を率いて周防國に下向し、杣山に入つている。^{（註9）}東大寺大佛殿の再建に必要な用材を殆んど周防杣に依存したのもこのような經緯によるのである。幾多の艱難心苦のすえによりやく建久元年（一一九〇）十月に大佛殿上棟、ついで同六年（一一九五）三月十二日落慶法要。この際には、後鳥羽天皇の行幸を仰ぎ、將軍頼朝も遙々鎌倉から下向して盛儀に參列している。

この期間が小稿の中心となるので、第三章で詳細に論じようと思つてゐる。

第三期は、造營の重點が大佛殿の脇侍像と四天王像の造立、および南大門の建築とその仁王像の製作に向けられた。そのほか、建久八年（一一九七）二月に八幡宮上棟。同九年（一一九八）三月戒壇院上棟。建仁元年（一二〇一）十二月廿七日八幡像開眼等もあつて、建仁三年（一二〇三）十一月卅日、土御門上皇來臨のもとに總供養をとげている。

東大寺大勸進職に任命されて以後の重源は、彼の八十六ヶ年の長い生涯の中で、最も脚光を浴びた花形の時代であつた。しかし、また、再建に伴なう心痛も想像を越えるものがあつた。

さて、私の分類に従がうと、前述の期間の中で、第二期が、重源にとつては、最も試練を伴つた苦勞の時代であつたと云うことが出来るようである。前述のごとく、私は、この期間を特に詳細に論じていくことにし

たい。

俊乘房重源に關する最近の研究としては、伊藤眞徹教授の「俊乘房重源の福田事業について」(佛敎大學々報第二十
八號所收)、南都佛敎會編纂にかかる南都佛敎特輯號「重源上人の研究」、角川新書 五來重博士著「高野聖」の中の
俊乘房重源に關する章等、私の管見に及んだいずれも勞作であるが、淺學菲才の筆者は、諸先學の成果に啓發されな
がら、社會經濟史的視點をも加味して、重源の勸進活動を特に東大寺再建に焦點をあてて考察しようと思うのである。

二

俊乘房重源の生涯の業績を知る上できわめて貴重な史料として、建仁三年(一二〇三)東大寺總供養のあとで錄され
たと思われる「南無阿彌陀佛作善集」と、建久八年(一二九七)六月十五日、重源が弟子の含阿彌陀佛定範に、伊賀國
の阿波、廣瀨山田、有丸諸庄、播磨國の大部庄、周防國の樺野、宮野兩庄、備前國の南北條、長沼神前、野田諸庄等
の寺領と、高野新別所、東大寺別所、渡部別所、播磨別所等の諸堂舎を讓つた「重源讓狀」とがある。これらはいず
れも根本的な資料として周知の處である。主としてこれらの史料によりながら、その他の東大寺關係史料、法然上人
關係史料、玉葉、吾妻鏡等を參考にしながら東大寺再建を論じていくことにする。

養和元年(一一八一)八月、俊乘房重源が東大寺再建大勸進職に任命された經過については、古來より二つの説があ
る。一つは、東大寺の史料による彼自身の夢告によるとする説と、他の一つは、淨土宗の史料による法然上人の推擧

(註12)

によるとする説とである。さらにその上に、最近、五來重博士は、明遍の推擧が大きな力をなしたのであらうと云う

(註13)

新説をだしておられる。今これらの諸説に對して、いずれの説によるべきかを論ずるゆとりを持たないので、諸説の

紹介にのみとどめて先を急ぐことにしたい。いずれの説によるにしても、重源が東大寺再建大勸進職に任命されたと云うことは、画期的な出来事で、それまでさして著名でもなかった重源が一躍時代の脚光をあびて、大きくクローズアップされてきたと云うことに、異論をさしはさむわけにはいかないようである。

治承四年（一一八〇）十二月廿八日、平重衡の南都焼打によつて、東大寺一山ごとくが焼亡してしまつた。この間の事情を「玉葉」の著者九條兼實は、

已刻人告云、重衡朝臣征伐南都、只今歸洛云々、又人云、興福寺東大寺已下堂宇房舍拂地焼失、於御社者免了云々、又惡徒三十餘人梟首之、其殘逃籠春日山云々、至于凶徒之被戮者、還爲御寺要事、七大寺已下悉變灰燼之條、爲世爲民佛法滅盡了歟、凡非言語之所及、非筆端之可記。（下略）
（春日）
 と傳えて、大いに嘆き悲しんでいる。（註14）

重源がいつ頃から東大寺と關係を持つに至つたかを考察する時、勿論養和元年（一一八一）八月。東大寺造營勸進の宣旨を賜つた時點において關係を持つに至つたことは明白な事實であるが、それ以前にもちよつとした出来事があった。即ち、治承五年（一一八二）二月下旬、重源は東大寺に參詣して、焼け損じた大佛を見て大いに歎いている。この間の事情を東大寺造立供養記は次のごとく傳えている。

養和元年四月九日、重源上人行向隆亭云、東大寺事再々感靈夢、仍二月下旬參詣彼寺、拜見焼失之跡、烏瑟之首落而在于後、定惠之手折而横于前、灰燼積而如火山、餘煙揚而似黑雲、日暗心消、愁淚難抑、遇一兩耆老、述心緒之處、爲勅使下向之由承之、仍所參也。

東大寺造立供養記の記載に作意があるかも知れないが、この記事をそのまま信用するとするならば、養和元年（一

一八二）四月にはすでに重源が東大寺再建大勸進職に任命される下地が出来ていたと見てもよさそうである。

養和元年（一一八一）八月。東大寺造督大勸進職に任命されて以後の重源は、まず手始めに、何を行なつたかと言うことが問題になる。重源が最初に行なつた事業は、焼け損じた東大寺大佛の鑄造であつた。しかも、まず大佛の螺髪を鑄することであつた。養和元年（一一八一）十月、重源は洛中の諸家を勸進して廻り、女院その他より奉加を受けている。^(註15)

これよりさき、養和元年（一一八一）八月、東大寺再建大勸進職に任命されるや否やすぐに「造一輪車六兩、令勸進七道諸國」と見えていて、四方の有縁に尺布寸鐵一木半錢の奉加を求めたようである。このようにして、老若男女上下貴賤の別を問わず、廣い範圍に勸進の實をあげていつたわけである。ちなみに玉葉養和二年（一一八二）二月廿日の條は、重源が東大寺大佛鑄造の費用を、主として知識物（勸進の奉加物）をもつてなす由を述べたことを傳えている。^(註17)

大佛の鑄造ははじめたもののなか／＼適當な技術者が現われなかつた。たま／＼宋の鑄師陳和卿が鎮西に渡つてきており、歸國しようとしては船が難波してその度に思いとどまつているのを、重源が懇望して大佛の鑄造のことにあたらせたのである。^(註18) 壽永二年（一一八三）正月廿四日、重源は初めて九條兼實の館に招かれて、來る四月頃には、大佛の鑄造が完成するであらうと云う報告を行なっている。その時に兼實に語つた言葉が實におもしろい。彼の勸進聖としての側面を遺憾なく發揮している。即ち、玉葉壽永二年正月廿四日の條は、

（前略）件聖人渡唐三箇度、彼國之風俗委所見知云々、仍粗問之、所語之事、實希異多端者歟と見えている。つづいて、重源が兼實に天台山や阿育王のことをことこまかに語っている様子が述べられているが、その内容たるや餘りにもお伽ばなしじみている。しかし、重源の話術が餘りにも巧みであつたためか、「此聖人之體、

實無飭詞、尤足可貴敬者也」と兼實は感心して全く信用したようであつた。

壽永二年（一一八三）二月十一日には、大佛の鑄造も益々進捗し、右手の鑄造が行なわれている。^{（註19）}四月十九日には、

いよ／＼大佛の頭部の鑄造が始められ、この頃から、鑄師草部是助等を加えて、五月十八日には、その鑄造を終り、

六月一日には磨き上げている。^{（註20）}東大寺續要錄造佛篇に見える「奉治鑄御佛工事」には、鑄師の内譯けを、宋朝工七

人、大工陳和卿 舍弟陳佛壽 從五人 日本鑄物師工十四人 大工散位草部是助 長二人 草部是弘 同助延 小工

十一人 是末 助吉 爲直 助友 貞永 延行 助時 助友 助包 是則 宗直 と記載していて、總勢二十一人で

この仕事にたずさわつたことが理解できるのである。

さきにも、一輪車六兩を作つて、尺布寸鐵一木半錢の奉加を求めて、七道諸國の有縁に勸進せしめたことはのべた

が、重源はさらにこの仕事に追い打ちをかけるように、より一層庶民勸進の實をあげんがために、壽永二年（一一八三）

頃から諸人に阿彌陀佛號を付し始めている。^{（註21）}法然上人傳繪詞卷第三に、

大佛の上人、一の意樂をおこして云、此國の道俗、閻魔宮にひさまつかむとき、交名をとればは、其時佛名を唱へ

しめむかために、あみた佛名をつけんとして、まづ我名をは南無阿彌陀佛^{云々}我朝に阿彌陀佛名の流布する事は、此

事よりはしまれり。

と見えている。しかし、このことについてはかなりの批判もあつたようで、青蓮院門跡慈圓は猛烈な批判を浴びせて

いる。愚管抄第六に、

大方東大寺ノ俊乘房ハ阿彌陀ノ化身ト云コト出キテ、ワガ身ノ名ヲバ南無阿彌陀佛ト名ノリテ、萬ノ人ニ上ニ一字

ヲキテ、空アミダ佛、法アミダ佛ナド云名ヲ付ケルヲ、誠ニヤガテ我名ニシタル尼法師ヲ、カリ、ハテニ法然ガ弟

子トテ、カ、ル事ドモシ出タル、誠ニモ佛法ノ滅相ウタガイナシ、是ヲ心ウルニモ、魔ニハ順魔逆魔ト云、コノ順魔ノカナシウカヤウノ事ドモヨシフル也、彌陀一教利物偏増ノマコトナラン世ニハ、罪障マコトニ消テ極樂ヘマイル人モ有ベシ、マダシキニ眞言止觀サカリニモアリヌベキ時、順魔ノ教ニシタガイテ得脱スル人ハヨモアラジ、悲シキ事ドモナリ。

と見えているが、慈圓の批判は、重源にとつてはおよそ見當違いで、重源が阿彌陀佛號を諸人に付したと云うのは、東大寺再建に庶民を結縁せしめる勸進の一手段としたにすぎないのであつた。このように考えてくると、彼はなかくの策略家であつたと云うことが出来る。

大佛の鑄造は、老若男女上下貴賤の合力によつて、順次完成へと近づいていつた。壽永三年（一一八四）正月五日、大佛の左手の鑄造を行なつてゐる。^(註22)そして重源の見込では、本年中に大佛修造の功を終るといふ。いよいよ完成まで

あと一步の段階となつた。六月二十三日、東大寺大佛の鑄造は、ほゞ終りに近ずいた。七月中には完成して、その後、最後の仕上げとしての鍍金をほどこすと云うことを造寺長官右中辨藤原行隆が兼實の處へ出向いて語つてゐる。^(註23)この

鍍金料として、鎌倉幕府の源賴朝が金千兩。奥羽の豪族藤原秀衡が金五千兩を合力してゐる。^(註24)その後、賴朝は再び元曆二年（一一八五）三月七日には、重源に對して米一萬石、砂金一千兩、上絹一千疋等を奉加してゐる。^(註25)

鎌倉幕府の棟梁賴朝が、何故にこのようにたび／＼重源に合力するようになるのかを考察するに、重源の依頼を心よく受け入れて、賴朝に合力をたのんだ西行の努力もさることながら、東大寺は平氏の南都焼打によつて焼失したのであるから、人心を掌握する上からも、いやでも平氏との對抗上強力な援助をおしまなかつたのであらうし、また、鎌倉幕府の權威の偉大さを天下に示す必要があつたからであらうと考えられる。元曆二年（一一八五）四月廿七日に

は、九條兼實は、大佛の像内に納める佛舍利及び願文を重源に渡し、八月廿三日には、これに清淨經などを加えて奉納する儀が行なわれた。^(註26)そして、いよゝ待ちに待つた東大寺大佛開眼供養の日が文治元年（一一八五）八月廿八日におとづれるのである。^(註27)

三

大佛の開眼供養は、とゞごおりなく行なわれたものの、大佛殿の再建が豫想外の難工事であつた。文治二年（一一八六）三月廿三日、周防國を東大寺造營料に宛て、重源をして國務を管せしむるの儀起るや否や、^(註28)重源は翌月十八日には早速番匠等を率いて周防國に下向し、杣山に入つてゐる。^(註29)この間の事情を東大寺造立供養記の記載に従がつて大略述べておきたい。

供養記の冒頭の部分は、

文治二年春、被寄周防國、四月十日、大勸進以下十餘人、并宋人陳和卿、番匠物部爲里、櫻島國宗等、始入周防杣と見えていて、周防阿彌陀寺鐵塔銘に見える日時とは若干の食違ひがあるが、^(註30)そのあとの記載がおもしろい。當時の周防國の狀態はと云うと、源平合戦のあとにて大變な損亡ぶりであつた。耕地は全くの荒蕪地と化し、庶民の生活は極度にひつぱくしていた。供養記は、^(註31)この慘憺たる狀態を、故夫者賣妻、妻者賣子、或逃亡、不知數者也、纔所殘百姓、若存若亡、爲上人着岸之時、國中飢人雲集也。と記しとゞめてゐる。

こゝにおいて、勸進聖重源の眞價が遺憾なく發揮されるのである。供養記は、上人發悲心、以船中米悉令施行矣、如此施行及度々之間、重賜農料種、令生活人民、爰巡檢材木之間、深谷高巖莫不歷覽、命杣人等云、於好木求得之輩

者、柱一本別可賜米一石云々、因茲杣人等各發勵心、不論谷峯、忘羸蟲負、以求尋好木也。と記載している。重源は、まず、疲弊した庶民に施米を行なつて彼等を手なずけている。そして、杣人等に懸賞米を支給して好木を求める手段としている。これは勸進聖の常套手段であつた。如何にして苦勞力を確保するかを苦慮する重源にとつては、當然の處置であつたのかもしれない。

重源は不足するであらうと思われる勞働力をおぎなうために新しい技術の開發にも努力している。周防杣において新しい工夫による轆轤二張を建てたと云うのもこのことの現われであつた。何分にも柱一本の長さも九丈から十丈、短かくても七、八丈はあつて、その口徑も五尺に及ぶものが珍しくなかつた。轆轤二張を用いて、七十人の人夫をもつて漸くこれを引く有様であつた。その柱を引くのを使用した綱は直徑六寸、長さ五十丈、五十人の力を合せて僅かにその一丈を持ちあげるくらいの重量があり、それを柱の本末に一本宛つけて引くのであるから、若し轆轤がなかつたら、一本の柱に千餘人の人夫を必要としたことであつた。用材運搬のために、數十丈の谷を埋めて險阻な地を平らにしたり、大きな岩を碎いて山道を開き、或は雜木を倒して荊を除き、或は谷から谷へと大橋を架けた。嚴寒の冬には氷をふんで人力を盡し、炎天の夏には流れる汗をふいて人夫を勵した。大材があるからと云つても好木を得ることはなかゝに困難な仕事であつた。數百本を切り倒しても僅かに十本か二十本の良材しか得られなかつた。何故かと云えば、伐採技術が未熟のために大木であつても伐採中に破損して使いものにならなかつたり、節枝が多くて柱としての利用價值に乏しいものが多かつた。

杣山から伐り出した材木は佐波川に落し、三谷、引谷兩河の落合うところに設けられた木津に集められた。木津には木屋所が設けられ、東大寺から任命された山行事がいて、集まつた材木を検査して合格したものには「東大寺」の

刻印を捺したようである。木津から海までの七里の間は河水を利用して用材を運搬するのであるが、水が浅いために百十八ヶ所の堰を設けた。四月上旬から七月下旬に至るまで堰に入つて仕事をつづけたので人夫の手足はたゞれてくさつてくるほどであつた。供養記は、この記事について、身力悉費盡畢、凡如此等大事、唯非一處二處、既數百處也、唯非一年二年、既數十餘年也。と述べている。とにかく大變な苦勞を伴つたようである。しかし、このような苦勞の結果、杣山の中には、材木運搬のために延三百町にも餘る道路が縦横に走り、木津附近は水が浅いので船四艘を柱の本末に結びつけて、これを浮ばせる工夫をしている。このように、筏組にも獨特の工夫をほどこし、また筏に用いる綱も普通のものではなくて、葛藤を用いると云う工夫をほどこしたので、周防國のものは底を拂い他國へ往つて葛藤を採集してくるほどであつた。以上が東大寺造立供養記に見える周防の杣出しの全貌である。

周防の杣から筏り出された材木は海路攝津渡邊別所へと運ばれた。渡邊別所で集積された用材は、淀川を逆登り、木津川を通つて、東大寺木屋所へと運ばれていつた。渡邊別所は周防の杣から運ばれてくる用材の集積地として重要な役割を荷なつていたようである。

南無阿彌陀佛作善集によると、重源の作つた別所として、東大寺別所、渡邊別所、播磨別所、備中別所、周防南無阿彌陀佛、伊賀別所、備前國の常行堂をあげることが出来る。また、重源讓狀によると、高野新別所専修往生院の名が見えている。高野新別所専修往生院の設立は別としても、その他の七別所の設立は、大なり小なり東大寺再建と云う大事業を推進させるための手段として設立された感が深い。

別所については、すでに早く井上光貞博士によつて東大寺光明山の別所が詳細に論じられ、^(註32)比叡山の別所については、菊地勇次郎氏によつて論じられた。^(註33)重源の設立した別所は、東大寺光明山別所や比叡山の別所とは少しく趣きを

異にするようである。重源の別所は、しいて云えば、菊地勇次郎氏の指摘された里坊に近い別所であると云うことが出来る。^(註34)

さて、重源讓狀、渡部別所の條には、渡部別所并木屋敷地副各券文と見えていて、渡部別所には木屋所が併設されていたことが諒解出来るのである。東大寺鐘樓岡別所の條にも、木津木屋敷一處副本券文と見えていて、鐘樓岡別所の附屬施設として木屋所が設けられていたことが見えてゐる。この條では具體的に、在二階九間二面倉一字、五間二面雜舍一字。とその設備の詳細を書きとめてゐる。

さて、總括的に周防の用材が東大寺へと搬入されるコースを考えると、柚で切り出された材木は、三谷引谷之衆の木屋所へ^(註35)と集められる。そこで東大寺から任命された防州佐波郡山行事、橘奈良定が、合格したものに「東大寺國威」と云われる鐵印を押す。これが海路はるばる攝津の渡邊へと運ばれ、そこで一たん集積され、さらに淀川、木津川を逆登つて東大寺の泉木津木屋所へと運びこまれて、そこで大々的に集積され、最後に陸路東大寺大佛殿の再建現場へと運びこまれたようである。

さきにも少しくのべたように、材木運搬の技術については、重源獨特の工夫がほどこされていた。筏組みには普通の綱ではなくて葛藤を用い、船四艘に柱の本末を結びつけて浮かし、浮柱之^(註38)祕術。と稱してゐる。鎌倉時代の初め頃はまだ船舶の發達も充分ではなく、九丈、十丈もある柱を海路運ぶのにも大變な困難が伴なつたであろうことは想像にかたくない。大型の帆船の發達にしても室町時代朝鮮から優秀な木綿布を輸入するようになって以後のことで、それ以前は大部分がムシロ帆の船か手こぎの船であつたであろう。^(註39)従がつて海路用材を運ぶにしても、先述の浮柱之祕術が應用されたものであらう。大變な艱難苦勞のすえによつて、攝津渡邊へと用材を運搬してきたことで

あつた。

さて、渡邊木屋所へ木材を集積してやれ／＼といきつくのであるが、そのあとがまた大變であつた。攝津渡邊から東大寺泉木津へと運ぶ淀川、木津川は登りである。上流から下流へと下すのであればさして手數もかゝらないのであるが、下流から上流へと押し登るのである。今日のように動力船を使えばさして造作もないことであるが、當時としては大變な仕事であつた。そこで引き舟をする人夫が登場してくるのである。

艀舟をする散所民的交通勞働者については、兵範記保元三年（一一五八）三月廿二日壬午の條に、

石清水臨時祭也。申斜着淀、殿散所入艀舟。無程渡了。（下略）

と見えている。こゝに云う殿散所人とは攝關家の散所人のことである。

西岡虎之助氏の「莊園史の研究」上卷「莊園における倉庫の經營と港灣の發達との關係」での章は、淀川の本支流沿岸の地に船津の機能をもつ莊園が多く發達したことを述べている。淀津には諸家の淀散所が構成され、藤原攝關家の散所も含まれていたことを指摘された。これらの散所人が艀舟のことに奉仕したのは疑いのない事實である。また、山崎津にも藤原攝關家政所の散所が設定されていたようである。神崎川および淀川本流の川口一帯は、古來の難波津を構成しており、重源の渡邊別所もこゝに位置していた。渡邊というのは大江御厨近邊の船津の呼稱で、大渡邊とも窪津ともいわれた。大渡邊の地は、仁明源氏の渡邊黨、もしくは渡邊海賊の根據地であつた。重源はこんな所に別所を設立したのである。（註40）

攝津渡邊から泉木津へと至る淀川、木津川筋は攝關家及び諸家の散所がおかれ、これら散所人の艀舟と云う合力によつて初めて泉木津東大寺の木屋所へと材木を運びこむことが出來たのである。

鎌倉幕府が重源に協力的であつたことはさきにも述べたが、引きつゞき周防の杣出しに積極的な協力をおしまなかつた。文治三年（一一八七）三月四日、源頼朝は、東大寺造營の材木運搬に妨害をなさず精勤すべきことを、周防國の地頭等に仰付けている。^(註41) 文治四年（一一八八）二月十八日には、東大寺造營について、重源に合力すべきことを、帥中納言經房に申渡している。^(註42) 文治四年（一一八八）三月十七日には、重源の請によつて、東大寺の用材を周防國から運搬するについて請文を進めている。^(註43) また、文治五年（一一八九）六月四日には、東大寺の用材を周防國から運ぶについて、これに特に力を盡した佐々木高綱を稱讃している。^(註44) これよりさき、文治三年（一一八七）九月頃、長さ十三丈にも及ぶ棟木を重源は高綱等の協力を得て、周防の杣から採取することができた。^(註45) 重源と佐々木高綱との周防國における關係は特に密接なものがあつたようである。建久二年（一一九一）閏十二月九日には、院廳御下文により、佐々木高綱を奉行として、東大寺の柱材四十八本を明年中に運送することを、幾内や西海の地頭等に仰付けている。^(註46) 建久三年（一一九三）十二月廿九日には、重ねて令して、周防國における東大寺造營用の材木を催促せしめている。^(註47) また、建久四年（一一九三）三月二日には、東大寺造營料米について、精誠を致すべきことを、周防國の地頭に命じている。^(註48) 建久五年（一一九四）三月廿二日には、東大寺大佛光背に用いる砂金の中、二百兩をまず送り、次いで五月十日に、残りの百三十兩を送り届けている。^(註49) 建久五年（一一九四）五月廿九日、諸國の守護に令して、東大寺供養の用途を勸進せしめている。^(註50) 建久五年（一一九四）六月廿八日には、御家人に命じて東大寺造營を助成せしめ、殊に大佛の脇侍菩薩像、四天王像、戒壇院等の工事の遅延しているのを催促している。^(註51) 建久五年（一一九四）九月二日、諸國に勸進した東大寺供養の用途の中、御布施を京都まで送り届けている。^(註52) このように頼朝は幾多の積極的な協力をおしまなかつた。建久六年（一一九五）三月十二日の東大寺供養の式典に参列するために、二月十四日に鎌倉を出立し、三月四日には京都に着

き、十日には南都に到つてゐる。そして翌十一日には、馬千疋を東大寺に施入してゐる。^(註53) 賴朝は、出來得るかぎりの力を盡して東大寺再興のことに合力した。彼は晴ればれとした氣持で東大寺供養の盛儀に參列したことであつた。

重源と賴朝との關係は以上のごとくであるが、重源は一方では、大佛殿再建の途上しばく九條兼實とも連絡を保つてゐる。文治三年（一一八七）正月廿六日には、兼實と二度目の會見を行なつてゐる。^(註54) 十月三日にも兼實に謁して、東大寺造營に關して、人夫のこと、麻苧のこと、材木のこと等を語つてゐる。

玉葉 文治三年十月三日庚午の條は、

（前略）

一 人夫事

算計國中庄々之家、若ハ五家別ニ一人、若十家別ニ一人、可被宛召、當時之沙汰田卒^シ天被宛之間、其數非幾、其役甚少、其故ハ在家之員數、不必依田數之多少、雖在家多田數少、雖田數多在家少、因茲或一身勤數返之役者も有り、或一年空ク通此役之者も有り、此條且ハ永營也、又無公益、仍所計申也云々（以下略）

と記しとどめてゐる。人夫の調達一つを取り上げて見ても、大變な仕事であつた。重源は、人夫調達の現況をこと細かに兼實に報告して、必要なだけの人數をそろえることが如何に困難であるかを指摘してゐるのである。從來の人夫調達方法が如何に現實に側してゐないかの實例をあげながら善處を要望してゐる。

今や重源にとつて、東大寺再建の用材の運搬等に必要なる人的資源の確保が最も重大な任務になつたようである。文治三年（一一八七）頃、東大寺淨土堂を建立して、^(註55) 「勤萬人之念佛」と云うことを立て前として、庶民を宗教的作善へと結縁せしめると同時に、東大寺再建の用材等を運搬するための重要な勞働力として、社會的作善へとかりたててい

つたのである。同じような趣旨から、文治三年（一一八七）頃から、周防阿彌陀寺の建立にかかつてゐる。^{（註56）}また、建久三年（一一九二）九月廿七日には、播磨淨土寺を建立してゐる。^{（註57）}等の出来事があつた。

建久二年（一一九一）頃、重源、半作の大佛殿に觀經曼荼羅と淨土五祖像を懸け、法然上人源空を請じて講じて講說せしむ。^{（註58）}と見える法然上人傳記の記載も實は庶民を結縁せしめる一つの手段として行なわれたことは明白な事實なのである。

このように庶民勸進の實をあげんとして色々な手段が講じられた。この間、建久元年（一一九〇）十月十九日、東大寺大佛殿上棟のことが行なわれている。^{（註59）}これによつて、一應の區切りがついたので、建久元年（一一九〇）十月廿七日には、東大寺の工人等を諸國の權守や介や目等に任ずると云う補任のことが行なわれた。^{（註60）}また、建久三年（一一九二）八月廿五日には、播磨國大部庄に改めて東大寺領としての榜示が立てられた。東大寺造營料の確保が如何に重大な問題であつたかが理解出来るわけである。具體的に淨土寺文書に、

左辨官 下播磨國

應任久安三年宣旨舊跡改立東大寺領當國管賀東郡内大部庄朽損四至榜示事

東限大墓 西限賀古川

四至

南限河内村 北限南條

と見えている。また、重源讓狀にも大部庄について、

播磨大部庄者、往古寺領也、然而廢到年尚、而南無阿彌陀佛申後白河院、充賜和卿、即成下宣旨、被差遣官使、改

俊乘房重源の東大寺再建について

打四至勝示。

と記載している。中村直勝博士「莊園の研究」第五 播磨國大部庄の章で大部庄については詳論されているので詳細はこれにゆずることにしたい。

さらに、建久三年（一一九二）三月十三日には、強力な外護者後白河法皇の崩去に出會つてゐる。^{（註61）}

このような種々の努力にもかかわらず、東大寺再建のことは困難をきわめたようであつた。建久四年（一一九三）正月十四日、高雄神護寺の文覺上人は、東大寺造營の困難なることを聞き、彼の預れる故後白河法皇領の備前國を、その造營料に宛てんことを申請してゐる。吾妻鏡建久四年（一一九三）三月十四日條は、東大寺造營のために、播磨國を

文覺に奉行せしむ。^{（註63）}と見えてゐる。また、建久四年（一一九三）四月十日、九條兼實は、重源及び造寺長官定長を召して、東大寺造營料として備前國を付すことを申し渡してゐる。^{（註64）}これよりさき、文治三年（一一八七）五月廿九日には、造東大寺司除目のことがあり、權右中辨藤原定長が、行隆に代つて造寺長官に任命されてゐる。^{（註65）}

文治五年（一一八九）六月四日には、重源は、九條兼實に對面して、東大寺造營の困難なることを語り、勸進職を辭退せんことを申し出ている。造營が如何に困難をきわめたかについては、次の史料がよくそのことを物語つてゐる。

即ち、

玉葉 文治五年八月三日庚寅の條は、

東大寺聖人重源來、餘謂之、語御柱百五十餘本採了、十餘本已付御寺了、上御沙汰不緩者、三ヶ年之内可造畢云々、而如當時者、周防國中之莊園人夫不合期、又一向有對捍所等、雖申上無御沙汰、又彼國被付造寺以後、新立莊及五六ヶ所了、如此者始終不可叶、諸國麻苧并人夫一切不叶、然間空領一州無成之由、必蒙謗難歟、仍只奉行御佛

事、欲辭造寺事云々、余再三加制止了。

と見えている。

この史料に見えるように、東大寺大佛殿の再興は大變な難工事であつた。さしもの重源をして、業なかばに造營のことを辭退せんとする決意をさせた程であつた。しかし、老若男女上下貴賤を論ぜず一體となつての合力の結果、あらゆる苦勞をなめながら、建久六年（一一九五）三月十二日。東大寺供養の運びとなつたのである。この日、後鳥羽天皇、七條女院殖子、將軍賴朝等がこの盛儀に參列。宣旨によつて、重源に大和尚の號が授けられたのであつた。^(註66)

四

建久六年（一一九五）三月十二日、東大寺大佛殿の再建のことは成り、東大寺供養は盛大に行なわれたのであるが、附帶事業はまだ残つていた。この期間、前にも述べた通り、建久六年（一一九五）より建仁三年（一二〇三）十一月卅日、東大寺總供養が行なわれるに至つた九ヶ年間であつた。この間、建久八年（一一九七）四月廿四日より八月廿八日の間に、東大寺戒壇院の造營のことが行われ、^(註67)正治元年（一一九〇）六月には、東大寺南大門の上棟のことが行なわれた。^(註68)建久七年（一一九六）には、東大寺大佛殿の石の脇土像、四天王像、中門の石獅子等が造られている。^(註69)

この間、造東大寺長官藤原定長も建久六年（一一九五）十一月十一日には卒去したので、三代目として、翌七年（一一九六）二月一日、藤原宗頼が長官に任命されている。^(註70)このように造東大寺長官も、行隆、定長、宗頼と三代に渡つたわけである。さらに、正治元年（一一九〇）正月廿日には、四代目として、藤原資實を長官に任命している。^(註71)

序論の分類に従うと、重源にとつて、第二の期間第三期は、東大寺造營の附帶事業もさることながら、各地に設立

した別所の經營にその主力がそそがれ、これらの別所を東大寺とより強く結びつけることが、最も切實な問題であつた。

建久六年（一一九五）八月五日に、重源は周防國へ下向し、その七日から九月廿八日までの間に、同國一宮の玉祖神社の造替をし、またその頃、同國の遠石八幡宮、小松八幡宮、末武八幡宮、松崎天神宮等をも造營している。^(註72)同年九月には、周防國宮野庄を特に東大寺領と定めている。^(註73)備前國については、建久七年（一一九六）十一月三日、備前國野田保を東大寺大佛燈油料地と定め、不輸地としている。^(註74)

建久八年（一一九七）十一月廿二日、重源の發願によつて造られた周防阿彌陀寺の鐵塔銘によると、大檀那として、國吏 留守所

多々良氏 日置氏 大原氏 源氏 大中臣氏 上氏 土師氏 賀陽氏 菅野氏 中原氏 佐波氏 胡氏 安部氏

矢田部氏の名が見えている。^(註75)これらは在廳官人の出自か、もしくは郡名を附しているものもあるので、その郡の豪族か、あるいは、古代の名族の支族がこの國にも繁衍したものであらうと推察される。そして、恐らくは戸主一個人ではなくて、戸主に率いられた一族郎黨を意味したものであらうと考えられる。これらが、あげて阿彌陀寺へと結縁したのであらう。一致協力して東大寺再興のことに合力した下部組織を形成したのであつた。

建久八年（一一九七）渡邊別所に於て初めて迎講を始む。と見える作善集や重源讓狀の記載を見ても、迎講を修することによつて庶民結縁の實を益々あげんとしたことは疑いのない事實なのである。正治二年（一二〇〇）十一月、周防阿彌陀寺における不斷念佛や長日溫室等の用途のための田畠を定めたこともまた同じ主旨によるとみなしても大過はないと思われる。正治二年（一二〇〇）には、同一の主旨のもとに、播磨別所においても迎講を始めている。^(註77)建仁元年

(一二〇一) 九月廿一日には、渡邊別所において迎講を行い、これに結縁したと思われる八條女院暉子内親王は、攝津頭成庄を念佛衆供料と佛性燈油料として施入している。^(註78) また庶民結縁と云う同じ主旨のもとに建仁二年(一二〇二)頃、伊賀別所新大佛寺が建立されている。^(註79) そして、いよいよ建仁三年(一二〇三)十一月卅日、東大寺の堂宇ことごとく完成して總供養が行なわれたのであった。^(註80)

五

養和元年(一一八一)八月、重源が東大寺大勸進職に任命されてから建仁三年(一二〇三)十一月卅日、東大寺總供養に至る二十三年間の東大寺再建事業と、それに附帶する事業を通覧する時、重源の設立した云々ゆる七別所は、東大寺再興のことをより有利に展開するための手段として設立されたと考えるのが最も妥當のようである。そして、その別所において、宗教的作善と社會的作善とも共に併せ行う庶民の結縁をもくろんだと考えても決して大過ないであろう。各地に残る別所には各々湯屋^(註81)が設けられていて、湯施行が行なわれたことが見えている。特に、渡邊別所においては、不斷念佛衆のための小湯屋と別所に結縁した庶民のための無差の大湯屋が設けられていたことは、このことを裏書きしていると云つても過言ではない。

俊乗房重源上人一生涯の勸進は、云わば、東大寺再建の大勸進に集約されていると考えても大過なさそうである。それほど、東大寺再建は難工事であり、また、彼がそれを成しとげたが故に今日もなお榮光を浴びつづけているのである。私は、重源上人に對して、不屈の金字塔をうち建てた画期的な業績をあげたと賞讃してもなお言葉がたらない感をさえ覚えるのである。

(完)

註1 紀氏系圖。續群第百六十八所收。手向山神社宮司上司家藏。參照

註2 淨土寺開祖傳。播磨淨土寺藏參照。本朝高僧傳卷第六十五、重源傳參照。

註3 建仁三年（一二〇三）頃、重源その生涯の事蹟を錄して、これを南無阿彌陀佛作善集と名付けている。

註4 作善集參照。

註5 右同じ

註6 作善集及び醍醐雜事記第七、第八裏書參照。

註7 二葉憲香教授「古代佛教思想史研究」永田文昌堂版參照。

註8 五來重博士「高野聖」（角川新書）五十四頁。

註9 玉葉卷第四十四。文治二年三月廿三日の條。

註10 阿彌陀寺鐵塔銘に見ゆ。

註11 東大寺造立供養記。

註12 黒谷源空上人傳第十、勸進念佛往生門。法然上人傳繪詞卷第三等。

註13 五來重博士著「高野聖」一八五頁。

註14 玉葉第三十五、第三十六。治承四年十二月廿九日の條。

註15 玉葉卷第三十六。養和元年十月九日の條。

註16 東大寺續要錄造佛篇。

註17 玉葉。養和二年二月廿日の條に、用途大略以智識物成寄之由、重源聖人令申云々。と見ゆ。

註18 玉葉卷第三十七。壽永元年七月廿四日の條。

註19 東大寺續要錄造佛篇。

註20 東大寺續要錄造佛篇。東大寺造立供養記。吾妻鏡卷第十五。建久六年三月十二日の條。東大寺要錄卷第五、別當章。

註21 作善集に、阿彌陀佛名付日本國貴賤上下事、建仁二年始之成廿年。と見ゆ。建仁二年から逆算すると、壽永二年頃から阿彌

陀佛號を付し始めたことになる。

註22 玉葉卷第四十。壽永三年正月五日の條。

註23 玉葉卷第四十。壽永三年六月廿三日の條。

註24 同右

註25 吾妻鏡卷第四。元暦二年三月七日の條。

註26 玉葉卷第四十二。元暦二年四月廿七日の條。同八月廿三日の條。東大寺續要錄供養篇。文治記。文治元年八月廿三日の條。

醍醐雜事記卷第十。元暦二年七月十七日の條。同じく、文治元年八月十八日の條。

註27 百鍊抄卷第十。文治元年八月廿五日條。山槐記文治元年八月廿七日、廿八日の條。玉葉卷第四十二。元暦二年八月廿八日の條。東大寺造立供養記。東大寺續要錄供養篇文治記。にも見ゆ。

註28 玉葉卷第四十四。文治二年三月廿三日の條。

註29 阿彌陀寺鐵塔銘に、造東大寺杣始文治二年丙午四月十八日。と見ゆ。

註30 同右

註31 東大寺造立供養記。文治二年春四月十日の條。

註32 井上光貞博士著「日本淨土教成立史の研究」三八三頁から四〇六頁参照。

註33 雜誌「日本佛教」第一號所收。菊地勇次郎氏「黒谷別所と法然上人」参照。

註34 雜誌「日本佛教」第一號十八頁から二四頁参照。

註35 阿彌陀寺文書。永正七年庚午十一月十二日の條。補任 防州佐波郡山行事職事。に「周防州佐波郡三谷引谷之衆木屋所」と

見えている。

註36 永正七年庚午十一月十二日付の阿彌陀寺文書に、補任 防州佐波郡山行事職事。橘奈良定と見ゆ。

註37 阿彌陀寺文書。永正七年庚午十一月十二日の條と、寛文五年乙巳九月廿八日の條とに見ゆ。

註38 東大寺造立供養記。文治二年春四月十日の條に見ゆ。

註39 改訂新版圖説日本文化史大系七 室町時代篇 小學館版一五五頁 寫眞二三〇の解説及び一五六頁参照。

註40 拙稿「散所と淨土教 中世篇」(佛教大學研究紀要 通卷第四十二、四十三合卷號所收)に渡邊別所が散所的色彩を持つて

いたことを論じた。「國學院雜誌」昭和三十六年五月、六月、七月の各月號に近藤喜博博士の「難波の渡邊黨」と題する論文があり、その中でも渡邊の地が散所的であることを論じられている。

- 註 41 吾妻鏡卷第七。文治三年三月四日の條。
- 註 42 吾妻鏡卷第八。文治四年二月十八日の條。
- 註 43 吾妻鏡卷第八。文治四年三月十七日の條。同じく四月十二日戊寅の條。
- 註 44 吾妻鏡卷第九。文治五年六月四日の條。
- 註 45 吾妻鏡卷第七。文治三年十一月十日の條。
- 註 46 吾妻鏡卷第十一。建久二年閏十二月九日の條。
- 註 47 吾妻鏡卷第十二。建久三年十二月廿九日の條。
- 註 48 吾妻鏡卷第十三。建久四年三月二日の條。
- 註 49 吾妻鏡卷第十四。建久五年三月廿二日の條。
- 註 50 吾妻鏡卷第十四。建久五年五月廿九日の條。
- 註 51 吾妻鏡卷第十四。建久五年六月廿八日の條。
- 註 52 吾妻鏡卷第十四。建久五年九月二日の條。
- 註 53 吾妻鏡卷第十四。第十五。建久六年二月十四日。三月四日。十日。十一日の各條。
- 註 54 玉葉卷第四十八。文治三年正月廿六日の條。
- 註 55 東大寺造立供養記。
- 註 56 華宮山阿彌陀寺略縁起周防阿彌陀寺藏。
- 註 57 淨土寺文書。建久三年九月廿七日の條。
- 註 58 法然上人傳繪詞（琳阿撰）卷第五。法然上人傳記卷第二、下 淨土曼陀羅事。
- 註 59 百鍊抄卷第十。建久元年十月十九日の條。東大寺造立供養記。建久元年十月十九日の條。
- 註 60 玉葉卷第五十八。建久元年十月廿七日の條。
- 註 61 東大寺續要錄諸會篇。建久三年三月十三日の條。
- 註 62 吾妻鏡卷第十三。建久四年正月十四日の條。
- 註 63 吾妻鏡卷第十三。建久四年三月十四日の條。

- 註 64 玉葉卷第六十四。建久四年四月七日の條。
- 註 65 玉葉卷第四十九。文治三年五月廿九日の條。
- 註 66 百鍊抄卷第十。建久六年三月十二日の條。玉葉卷第六十六。建久六年三月十二日の條。吾妻鏡。卷第十五。建久六年三月十二日の條。
- 註 67 東大寺造立供養記に、建久八年四月廿四日、始造戒壇院、至同八月廿八日造畢。と見ゆ。
- 註 68 東大寺要錄卷第五、別當章第七。
- 註 69 東大寺造立供養記、建久七年の條。
- 註 70 三長記。建久六年十一月十一日の條。辨官補任。建久六年並びに建久七年の條。
- 註 71 明月記。正治元年正月廿日の條。
- 註 72 一宮造替神殿寶物等目錄玉祖神社藏。建久六年九月廿八日の條。
- 註 73 東大寺領周防國宮野庄田畠等立券文。防府上司家藏。
- 註 74 東大寺續要錄寺領章。建久七年十一月三日の條。
- 註 75 建久八年十一月二十二日の銘の見える、阿彌陀寺鐵塔銘に見ゆ。
- 註 76 阿彌陀寺文書。正治二年十一月八日の條。
- 註 77 作善集播磨別所ノ條。
- 註 78 百鍊抄卷第十一。建仁元年九月廿一日の條。に迎講のことが見え、作善集には、頭成庄施入のことが見える。
- 註 79 作善集。御寶山新大佛寺來由記。新大佛寺記等に見ゆ。
- 註 80 百鍊抄卷第十一。建仁三年十一月卅日の條。明月記建仁三年十一月卅日の條等。
- 註 81 作善集や談狀の各別所の條に各々湯屋が設けられていたことが見えている。

